

＜「私的労働:自分の使用価値の自分労働」から「社会的労働:他人の使用価値の他者協働」へ＞

9p 第5章の「単純な労働過程」の規定、「全労働過程をその結果の立場から見るならば、労働手段と労働対象との二つは生産手段として、また労働そのものは生産的労働として現れる。」(2分冊15p5L)という規定は、「資本主義的生産過程」の規定には「十分ではない・不十分」(注7で指摘)。

後5L 「純粋に個人的な労働過程」では、「同一の労働者」が「全ての機能」を結合していたが、後(資本主義)では分離する。

「生活目的(①生活手段)のために行う」彼の「自然対象(②労働・生産手段と③労働対象・原料)の個人的獲得(領有)」では、「労働者・個人・主体」が、自分自身つまり「④精神労働(頭の労働)と⑤肉体労働(手の労働)の合一である生産的労働」を統御した。しかし、後(資本主義)では、それら(①～⑤)はすべて「分離」し、(資本として)「敵対的対立」をなす。

※(1)「客観的生産諸条件」の①～③は「自然物か、過去の労働の人工物」で存在。(2)「生きた労働」が④⑤。(3)「それを領有する主体」。この「主体」による(1)(2)の「領有のされ方」が「所有」。

※「封建的私有」:「労働者自身」は(1)も(2)もある程度しか領有していない。(共同体・領主も領有)

※「個人的私有」:「労働者自身」が、(1)も(2)も領有している生産様式。

※「資本主義的私有」:「他人(資本)」が労働者の労働である①～③を領有し、労働者が生産した①との交換で、④・⑤も、すべて領有する。

※「奴隷所有」:「労働主体が所有」され領有概念の「外」。これは「所有」ではなく人的「支配」。

10p 生産物は、「個人生産者の直接生産物」から、「社会的生産物」=「全体労働者の共同生産物」=「分離している結合労働総員の共同生産物」、に転化する。

※「結合労働者=工場内分業」、その連結としての「全体労働者=社会的分業」、サプライチェーン

※「社会的所有」=「総員の共同生産物所有」=「全社会的分業参加者による所有」=本質的には国有も超える大きな下部構造概念。「コモンズ」のような混濁した概念とは全く異なる。

生産的労働(者)の概念は、必然的に拡大される。「全体労働者」の器官・部分機能としての労働。

※「自分で手を下す必要はない」:監督・事務・商業・金融・サービス・公務等、自国の約8割の労働は、「生産しない労働」。半面、「世界市場・貿易」で、他国の多くの「他人の手」と「全体労働」。

6L 前の規定は「物質的生産の性質」からの規定で、今でも「全体労働者が行っていること」として正しい。だが、「個人」の視点では、もはや当てはまらない。

※マクロ・「全体労働総体」では、「全生産手段」と「全生産的労働」が、「全構成員」の「全物質的生産」を行っている。しかし、ミクロ・個人では、①誰一人「自分の目的である生活手段を生産しない」し、②「資本の目的」での敵対的労働が強制され、「単純な労働過程」は完全に破壊されている。

※「個人的私有」の「否定」としての「資本主義的私有」

＜生産的労働の変化:「本人の使用価値生産」から「支配階級の剰余価値生産」へ＞

10L 他面、「生産的労働の概念」が狭められる。労働者は(モノ・使用価値)を生産するだけではなく、資本のために剰余価値を生産する。資本家のために剰余を生産する労働者のみが「生産的」である。

※「狭められる」:剰余を出さない、「自己消費の生産」は「不生産的労働」に転化する。

※「拡大」が「肯定:文明化・資本の歴史的使命:社会主義」、「狭小」は「否定:資本の歴史的限界」。

最終L つまり、「生産的労働者の概念」は、労働者と労働生産物(使用価値の増大)との関係だけでなく、労働者を資本の直接的価値増殖手段(価値の増大)とする、特殊歴史的な生産関係も包含する。資本主義では、生産的労働者であることは不運である。・・・重農学派は農耕労働だけ(地代)を生産的とした

※アダム・スミスの「生産的労働説」の批判:スミスは「モノの生産の労働=労働者と労働生産物との関係」だけを生産的とした。商業や教育等の労働は「富の消費」であり「不生産的労働」とした。

※新たな歴史的生産関係である「社会主義」でも「生産的労働」は当然変わる。資本が「剰余価値の蓄積」の目的だけに行った、「生産や商業・サービス業さらに家事や政治などの上部構造での『社会的空費』である労働」の節約・短縮は、「自由時間の増加」という新たな目的・尺度で生産的労働となる。資本主義はそれ自体ではなく、「自由時間」を「剰余価値にすること」しか行わない。

＜資本主義的生産様式の核心は相対的剰余価値生産:内包的発展＞

11p9L 労働力価値の等価を超えて労働日が延長され、資本がその剰余労働を領有することが絶対的剰余価値生産である。資本主義の一般的基礎、相対的剰余価値生産の出発点。相対的剰余価値生産では「必要労働時間が短縮」されるが、絶対的剰余価値生産では「労働日の長さ」のみを「問題にする」。相対的剰余価値生産は、①「労働の技術的過程(科学的応用による生産手段・固定資本)」と②「社会的人員配列(社会的分業や工場内分業での結合労働者組織)」を変革する。

資本による労働の⑦「形式的包摂:外延的発展」の中で、相対的剰余価値生産は「自然発生」し、⑧「実質的包摂:内包的発展」へと進む。

※資本主義の本質・本性は④「内包的発展・相対的剰余価値生産」。それは、①と②が主導する。:さらに①も②も源泉は「人間自身・精神労働」でしかない。「肉体労働は実験・体育」のようなもの。

<封建制から資本制への移行期の様々な中間形態>

- 12p3L 「直接的強制:上部構造に依存した封建制・奴隷制」でもなく、「資本の形式的発展:自立した個人と下部構造」でもない、「中間形態:独立した手工業・農業＝個人的私有、高利貸資本・商人資本」は、資本主義的生産様式を排除する。しかし他面で、そこへの過渡を形成する(高利貸資本・商人資本の「貨幣退蔵」が資本の発生源)。

※歴史は、「①人・人格的支配 →②モノ・物神支配 →③共同する諸個人の協同体(社会主義)」

※①②間に、「個人的私有:①独立自営農民(ヨーマンリー)②独立手工業者(ギルド・ツunft)」

<相対的剰余価値生産は、⑦労働の生産性か④労働の強度を変化させる>

- 12p11L 絶対的剰余価値生産は「資本への労働の形式的包摂」だけで(単独で)成立する。しかし、相対的剰余価値生産は、同時に絶対的剰余価値生産の方法でもある(大工業による14時間労働への延長等)。この「特殊」な相対的剰余価値生産という生産様式は、資本主義の「一般的・支配的」形態となる。「特殊」なのは、①「形式的支配」を捉える普及期、②それがすでに捉えた産業が、継続して変革される場合だけ。
- 13p6L 区別は幻想的に見える。相対的剰余価値も絶対的(必要労働時間を超えた「労働日の絶対的延長」が条件)、絶対的剰余価値も相対的(必要労働時間が労働日の一部となることを可能とする「生産性の発展」が条件)、だからである。
- 13p10L だが、資本主義的生産様式が一般的生産様式になると、この区別は感知できるものとなり、剰余価値率を高めるには、労働力が価値どおり支払われるとして、①労働日の延長(絶対的)か、②必要労働時間と剰余労働時間の相対的な量的変動、のどちらかが必要である。②はさらに、⑦「労働の生産性」か④「労働の強度」の変動が条件となる。

(より根本的条件は)「ある程度の労働生産性(生産力水準)」がなければ、第三者のための無償労働・剰余労働・労働者のかような「自由時間」は、残らない。

※「一定の高さの生産力」が大前提。「剰余」が「退蔵貨幣」を形成する「歴史的前提」も。

<剰余労働・価値は「他人の労働の搾取」という社会的関係から生まれる:源泉は非自然的>

- 14p10L 剰余価値の「自然的基礎なるもの」(出現の理由)が問題となるが、それはただ、「自己の生存に必要な労働」を「他人にやらせること」を妨げる自然障害は存在しないということ(他人労働を搾取したもの)でしかなく、「神秘的観念(労働は剰余を生む生得の性質も持つ等:19p)」を結びつけてはならない。

労働自体がすでに社会化されているときにのみ、ある者の剰余労働が他者の生存条件になる。

「文化の初期」には「生産力(剰余労働)」は微小で、充足手段とともに発達する「欲望」も微小。だから「搾取階級」も出現するが「微小」。労働の社会的生産力の発展と共に、「剰余労働も欲望も」発展し、「絶対的(支配階級の人数)・相対的(総労働に占める剰余労働の割合)」に増大する。

資本の出発基礎となる労働生産性は、自然的なものではなく歴史的・社会的なものである。

※「文化＝国民の常識＝労働力価値」の国別差異:現代の「所得の少ない国」での「人口爆発問題」と「ほぼ餓死しない所得の高い国」での「人口減少問題」。「個人の自由度・欲望の高さ」と同問題。

※資本主義の成立には「一定の歴史・生産性水準」が必要。「資本家の欲望」が労働者の剰余労働で満たせるだけ「自由な労働者たち」が必要、他方でその「自由な労働者の生存維持」が確保できる広さでの商品経済の発達が必要。当然、社会主義にも「前提となる生産力水準」がある。

- 15p13L 「労働の生産性」は、①「主体的自然」・人間関係と②「客観的自然」・外的生産諸条件と結合し、②はまた⑦生活手段と④労働手段(生産手段)の二つに分かれる。文化の初期には②⑦の自然的富がより高い段階では②④が決定的役割を持つ。

①主体側:「自然的欲望」が少なく②客体側:「自然の豊度」が大きいほど、③労働:「必要労働時間」は少なく、他人のための剰余労働時間は大きくなる可能性がある。③「必要労働の少なさ」は、ミクロ・個人では多くの剰余労働を「提供」できること、マクロ・国民経済全体では、⑦「第二部類:生活手段生産」の人口を小さく、④「第一部類:生産手段生産」の人口を大きくできる。

※「客観的自然条件が豊か」であれば、「剰余労働・剰余人口」は大きい。熱帯での「文明発生」。

- 17p3L 資本主義でも(前提・当初)は同じだが、逆に、「自然(土地)の豊かさ」が「資本主義の成長」に最適である、とはいえない。資本主義は「人間による自然の支配」を前提とする。「自然(土地)の豊かさ」は人類を「自然依存」にし、「人類の発展」の必然性を奪う。

資本主義の母国は熱帯ではなく「温帯」。豊穡ではなく「多様性」が社会的分業の基礎であり、(そこで自然依存を離れ)「人類自身＝主体による人工的」な「新たな、欲望・能力・労働手段・労働様式」の多様化が刺激される。自然力への「社会的な統制・節約」、「人工的」な「領有・馴致(クンチ)」が、産業に決定的な役割を演ずる。治水・運河による灌漑や運搬

※資本主義は「人間による自然の支配」:「生存(必要)」を超え「人間本性の発展のために利用」
 ①客観的生産諸条件(原料・生産手段・生活手段等)の主力は、自然物ではなく「労働生産物・人工物・社会的生産物」。エネルギーも「化石」から「光・風・潮流・地殻・・・」。マルクスは知らなかった？
 ②自然は、「客観的生産諸条件」から、そのための「単なる素材供給源」に転化。「固定」終焉。
 ③最も明快な現象が、「都市と農村の対立:農業労働の激減:農村の没落:農業の工業化」
 ④自然支配の「手段」の中心は「科学・技術」。その本質は「人間の精神活動(労働)」。

19p2L 「自然諸条件」の恩恵は、剰余価値の「可能性」を与えるのみで「現実」を決定しない。「自然諸条件」の差は、同一労働量での「生産物量(充足欲望)」の差となり、一般的には「国ごとの必要労働時間の差」となる。結果、剰余労働に対して「自然的限度(必要労働時間が決められる:そこから先が剰余労働)」としてのみ作用する。産業発展により、この自然的限度は後退する。

「剰余労働をすること」が「必要労働ができる(雇用)条件」である西欧では、剰余生産物供給が「人間労働の生得の性質」という(神秘的・プルドンの)考えが主流。しかし、東アジアのパン採取者は「わずかな自分の欲望充足労働・必要労働」しかせず、「自然の恩恵」は「多くの暇な時間」を与える。

「暇な時間」を「自分のための生産時間」(自己のより発展した欲望の充足:個人的私有)にするには一連の歴史が必要だが、さらにそれを「他人のための剰余労働」(資本主義)とするためには外的強制(本源的蓄積)が必要である。

※種族共同体:「自然的基礎」での「生産手段の共有」→「個人的私有」:「自然的基礎」での「生産手段の私有制」→「資本主義的私有制」:「社会的・人工的基礎」での「生産手段と他人労働の所有」→「個人的所有」:「社会的・人工的基礎」での、「生産手段共有」による「自己労働の所有」

資本主義では、彼は自分の「生活手段・必要労働」のために、「暇な時間」は「剰余労働」しなければならない。自然の恩恵が説明できるのは「必要労働時間」だけであり、剰余労働は「人間労働に生得な神秘的性質」から生じるのではない(社会的生産関係:「社会の支配」)。

21p1L ①「歴史的に発展した社会的な労働」と②「自然に制約された労働」の両生産諸力は、その労働が合体する資本の生産諸力として現れる。以下、ブルジョア経済学批判。

・リカード:「剰余価値の起源(他人労働の搾取)」は問わず、資本主義は「社会的生産の自然的形態」(剰余価値は自然に発生)として、「剰余価値の大きさの規定原因」を求めただけ。

・リカード学派:「労働の生産力」を剰余価値の「原因・起源」としたが、それ以上(搾取)に出ない。

・重商主義:「交換」での、生産費以上の価格超過を「原因」とし、「労働」原因より遠い。

※リカード:①「労働」の価値が「賃金」「利潤」「地代」に分解する②労働者の「賃金」は「労働の対価」だから「等価を支払済み」③「利潤」は「支払済みの労働」を超える「自然の恩恵」④「剰余価値」と「利潤」を同一と理解した(剰余価値の概念がなかった)ので、「生産手段によって利潤率・利潤が変動」する問題、特に「傾向的な利潤率低下」を全く解けず、その意味での資本主義の終焉も予感した。

21p後3L J・S・ミル批判。

・(価値と使用価値が混同した)リカード派の「剰余価値の原因」説を、「生活手段・生産手段が、生産に必要な時間よりも長時間持つこと」(持続している間の労働が剰余となる)という自説の「根本原理」(やゆ)に言い変えた。しかしこれは、「生産物の持続期間」が短いものには当てはまらず、「労働時間の持続」を「生産物の持続」を混同した説。

・重商主義批判として、この「真理」は剰余価値が「労働の生産力」から生まれることを示し、「交換が行われない生産」でも発生する、と主張。資本主義の一般的条件である交換を「偶発時」とした。

22p後5L 「一国の全労働者が、その賃金額より20%多く(の額)を生産するならば、物価に関係なく、利潤は20%」という説。①賃金と剰余価値の問題としては、単なる同義反復にすぎないし、②「利潤率」おしては、生産手段への投下を含む総資本との比率なので、20%ではなくもっと低くなる。

・「資本家は労働者の賃金を含む全てを前貸しする」のが「現実の事態」と言うが、実際はそれは例外で、「遅配・労働者が資本に前貸し」が一般的事態(「法・理論」はそうだが、「現実」は「違法状態」:逆)。

・「資本家が賃金を前貸しすることは絶対に必要なことではない」(これは「違法」)、もし「労働者が労働完了まで賃金全額の支払いを待てるのなら、彼はある程度までは、事業投資や事業の必要基金を提供する資本家である」という、完全な詭弁の学説。(労働者は剰余価値を受け取ることはない。「理論的」な認識は、「前提」も「結論」をメチャクチャでボロボロ。)

24p9L ・また、「アメリカの農民:封建制農奴」も収穫後(労働完了後)に現物を貢納する資本家になるので、資本主義は「存在しなかったときも存在すること」になる。

・さらに、「労働者による賃金前貸(遅配)」は、労働者は「労働を市場価格以下で売ること(価値と価格との)『差額』(『剰余価値』)を資本家に前貸しする等」と言う。「前貸」は資本からの賃金支払いにより、この「差額」が「剰余価値」となり彼は資本家になる。資本主義は「存在するときにさえ存在しないこと」(労働者とは資本家への前貸で剰余価値を得る「資本家」であり階級は消滅)を論証しようとした。

※ミルの学説は、「理論的」にも「歴史的」にも、「全て間違い」である。